庚壬等の方にあたれば、兄弟（エト）の兄也、甲乙をもて、兄弟とする也、此くりやうは、

甲己歳は甲方　寅卯間

乙庚歳は庚方　申酉間

丙辛歳は丙方　巳午間

丁壬歳は壬方　亥子間

戊癸歳は丙方　以上は、故人小西梁山話也、

〔鹽尻三十〕歳徳の方を俗にゑ方と云、吉方とかくなり、伊勢守記、寛正六年八月、今出川殿の夫人産の所にみへたり、吉をゑとよむ事、住吉をすみのゑと讀むと同じ、

〔玉襷八〕斯て、毎年に、上より分布し給ふ、假名暦に、歳徳明方、ことしは何方ぞと御教まして、萬よしと載させ給ふ事なるが、此は唐土の暦法を用ひ給ふより、始れる事にて、暦法の書どもに、向此方萬事有大幸とも、歳徳方一年間有徳方也とも見えたり、此を俗に歳徳神と稱して、元より實神と、或は簠簋内傳により、此は南海の龍女、婆利采女、亦名は稲田姫と申し、素盞嗚尊、亦名は牛頭天王の后神なるが、謂ゆる八將神の母神なりなど云ふは、吉備の眞備公の、始めて須佐之男命に、牛頭天王といふ名を負せて、暦神とせし時に、作れる妄誕なれば、取るに足らず、此由は、予別に牛頭天王暦神辨と云ふを著して、其に委く辨へたり、是を以て、此正朔を奉ずる限りの人は、貴賤貧富を云ず、誰しの家にも、正月には、其謂ゆる明方に、歳徳棚と云を設けて、注連を引亘し、いみ清めて、種々の物を獻りて、當年の穀物の生就は更なり、幸福をも祈り白す事なるが、其祭る意ばへは、唐土の暦書の旨とは異にして、專と御年の皇神たちを祭る意なるを思ふに、此はいと古昔より、上件の由緒によりて、戸ごとに、年の始には、祭り來にけむを、分ち賜はる暦の、歳徳明方の御教令に從ひ奉り、其をうち混じての祭禮と見えて、實に然も有べき事とこそ思はるれ、然るは、歳徳と稱ふるは、謂ゆる湯桶訓なるが、正しくはサイトクと云べきにて、唐土の暦書どもに、歳徳の方を、年の始めに皇國にて、今祭る如く、家々にて祭るべき由を記せる書の無をもて、かくは云なり、然れば、古學せむ人などは、此意ばへを、殊に慥に思ひ定めて、大年神、御年神、若年神を迎へて祭る心を